
Typhoon Friends

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T y p h o o n F r i e n d s

【Nコード】

N 7 3 4 8 T

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

可愛いキャラクターのコメディショー。台風X号オールスターズ作品です。

1話 始まりだよの巻

自幻界それは、自然幻想世界の略である。

そこに住むのは、可愛いケモノ達。

ここに住む子たちの名前は、台風のアジア名や引退した名前、ハリケーンの引退した名前、サイクロン一部の名前、そして伝説を紡いで有名になった台風の名前を持つケモノ達。

姿は、ハピツリのキャラに似ているが、あまり似ておらずアニフレに近いキャラクターになっている。

可愛いケモノ達のドタバタコメディが始まる。

ダムレイとビリスとウサギとパーマアとルピートは、クラウドとレニーとノエルとグスタフとゾーイとサオマイと一緒にかくれんぼを楽しんでいた。

鬼は、グスタフである。

グスタフは、サーモグラフィーの能力を持つが見習いなため、めまいを起こしやすい。

そのため、勘を頼りに探り当てることにしている。

もうすでに、ダムレイ、ビリス、ウサギ、パーマア、ルピート、レニー、ノエル、ゾーイ、サオマイは見つかっていた。

「残すは、クラウドだね。」

「でもクラウドってどこに隠れたのかな？」

「あちゃー。」

「どうしたのゾーイ君？」

「実は、クラウドの能力厄介なんだよ。」

「クラウドの能力って？」

「透明化になったりする能力だよ！」

「うわぁ、それじゃ難しいな。」

みんなは、クラウドを探していた。

クラウドは、木の上に隠れていた。

能力を使わずに。

「僕って、ある意味天才？」

グスタフがサーモグラフィーを使い、周りを探していたら一つだけ温度の高いところを見つけた。

「もしかして、クラウドかな？」

みんなが、一本の木の上を見上げた。

「あゝ、見つけた！」

「やはり見つかったorz」

夕方になり、みんなは自分達の家に戻って行った。

1話 始まりだよの巻き（後書き）

次回 第二話 ツンデレっ子メイミーの騒動。お楽しみに！

2話 ツンデレっ子メイミーの騒動の巻

自幻界それは、自然幻想世界の略である。

そこに住むのは可愛いケモノ達。

今日はどんなストーリーが待っているのか。

メイミーの家に、ファナピとモーラコットとファクサイが遊びに来ていた。

「僕、お茶出すからお菓子でも食べて待ってて。」

ファナピがメイミーの代わりにお茶を持ってきた。

モーラコットはメイミーに言った。

「メイミーちゃん。ファナピ君とはうまく付き合ってる?」

ファクサイが両手でハートマークを作っていた。

「ぜ、全然付き合っているわけじゃないからね。」

「本当は、付き合っているくせにこのリア獣。」

「うるさいわねファクサイ君。」

メイミーは、心の中では、デレデレとしていた。

（もぉー、そんなこと言わないでよ！モーラコット君。恥ずかしいわ。って何しているのよファクサイちゃんは・・・）

メイミーは、体が熱く感じ始めてきた。

「お茶持ってきたよー。」

「みんなは、おいしそうにお茶を飲んでいた。」

ファナピはメイミーの顔が赤くなっているの見て疑問を浮かべた。

2話 ツンデレっ子メイミーの騒動の巻(後書き)

次回 3話 ダムレイ君遊ぼうの巻。お楽しみに！

3話 ダムレイ君遊ぼうの巻

自幻界の物語が幕を開ける。

午前8時、ダムレイはまだ寝ていた。

「ぐー、ぐー」

カレンダーには、今日はキロギーとパーマアとツアターンと午前9時に釣りを楽しむというスケジュールであった。

此の状態で寝ていたら間に合うのだろうか？

午前8時45分、ダムレイが起きた。

「やべえ、もうこんな時間かよ。急がなきゃー！」

ダムレイは、釣り道具を持ってキロギー達の所にやってきた。

「あと50秒で遅刻だったよ。」

ツアターンがダムレイに言っていた。

「悪い悪い、ゆうべは寝つけなかったんだ。」

そのあと、楽しく釣りをして、釣った魚を食べたり川に返したりして夕方になった。

「じゃあな！」

「ああ、キロギ―また釣りをして遊ぼうぜ！」

「おう！」

3話 ダムレイ君遊ぼーの巻（後書き）

次回 4話 ブツブツを言うこと。お楽しみに！

4話 ブツブツ言うこと

クロヴァンとノックテンとトカゲとグスタフとパロマは、バトミントンをしていた。

パロマは、点数番担当、ノックテンは、審判。クロヴァンは、休憩していた。

トカゲとグスタフの成績は、0－30、セットでは、3－3と大健闘である。

トカゲは、後がない時に結構強くなったりする。

「とんでもなく、強くなりよったー!」

15－30となった。

「くっ、トカゲの奴以外と撃たれ強い。」

グスタフの撃ったショットは、外れてアウトとなった。

「しまったー!焦りが来ちゃった。マッチポイントは4だから気を緩めると負ける。」

グスタフのショットを今度はオーバーフロー型のスマッシュで撃ち返した。

「ひええええええ!30－30になった。まずい、まずい、バトミントンでも結構強い俺が負けたら下剋上になる。」

闘志を燃やしているグスタフは、次のショットを打つも届かなかった。

45―30という成績、あと一回ミス打ちしたり、打たれたりして取れなかったりするとグスタフの負けになる。

「冷静になって、考えてからサーブをするぞ。よく考えればトカゲの盲点がつけるのだ。」

グスタフは3秒で考えてから打った。

しかし、トカゲの冷静なショットとグスタフの焦りのショットが5分間続き、最終的にはトカゲが勝利してしまった。

「く、負けた。」

「次の対戦は、クロヴァンとパロマだよ。」

4話 フツフツ言うこと（後書き）

次回 5話学習。お楽しみに！

5話 学習

リービは、図書館のある資料を見ていた。

「なるほど、ある出来事と同じなんだ。」

ある出来事それは……

2004年台風大量上陸事件の原因であった。

いまだに、地球温暖化による原因と言われているが、2004年以外にも大量上陸事件があることが分かった。

1950年である。

リービは、その資料深く読んでいくとあることに気がついた。

「2004年の台風の名前の名簿の中に2011年に活躍している台風がいくつかある。」

マーゴンがリービの所に来た。

「やあ、リービ。」

「マーゴンどうしたの？そんなにやつれていて。」

「日本に上陸はできたものの、人間無勢にまさか負けるとは。」

「えっ人間無勢に？」

「あんとき、正直オホーツク海高気圧に勝てる自信があったけどなあ。けど日本は今、震災とかで絆の力を強くしてるのもあるし、なでしこジャパンっていうサッカーのチームが優勝したという熱気の原因なのか人工的に高気圧が生まれて俺の負けになったっていうわけだ。っあれ？」

リービは図書館をすでに出ていた。

「まっ、いっか。」

5話 学習（後書き）

次回 6話ネサット君を眠らせる大作戦。お楽しみに！

今回は、子供向けになっています。なんだかドタバタしていて面白い風味を出せたらいいなと思っています。

緊急告知、なんと、Typhoon Friendsが同人誌とな
って登場決定！来年の夏まで待たれ！

6話 ネサット君を眠らせる大作戦

ネサット、種族テンジクネズミ、性別男。

彼はあまり眠らない。不眠症ではないけど。

「また笑い声が聞こえているよ。」

「ネサットのことか。アイツ俺達とは違って睡眠時間が1時間25分だもんな。」

「あいつの睡眠時間、4時間に引き延ばそうぜ。」

カルメンがダムレイ達に言った。

「確かに、泊りに来てから3日間。このままだと俺達もやばいよ。」

「寝不足は敵だ。」

ダムレイ達、6人は計画を練った。

「なあ、ダムレイはこういう作戦で行く？」

「ネサット君を強制的に眠らせるのはかわいそうだからってカトリナちゃん何持っているの？」

カトリナは、分厚い本を持っていた。

「強制的に眠らせるなら私に任せて、アメリカの伊勢湾台風と言わ

れた私だからできるのよ。」

「殺気がすごく怖いよ！」

「それに、怖いことを言わないで！」

ダムレイとラナニムとチャンチーとナルギスとグチヨルは、背筋が凍りそうになった。

まだ此の五人は、青ざめた状態のままであつた。

「ラナニム、何かいい方法は。」

「あれ？」

「どうしたの？」

「テレビの音がしない。」

「ホントだ。」

「笑い疲れて眠ったんじゃないのか。」

「そうだな。作戦考えなくてもよかった・・・」

「ふふふ、寝ているところ襲って・・・んーんー！」

「はいはい、良からぬことは考えないの。」

そのあと6人もぐっすりと寝た。

6話 ネサット君を眠らせる大作戦（後書き）

次回 7話伝説の台風「室戸台風」の巻。お楽しみに！

次回、ついに伝説の台風が登場。どんな展開になっていくか見ものです。

7話 伝説の台風「室戸台風」の巻

ダムレイ達、10人が集まってあるお話をしていた。

「知ってるか、カトリーナちゃん。」

「なんなの、ノグリー君。」

「室戸台風って知ってる？」

「分かんないや。」

「教えてあげよう。室戸台風っていうのは伝説の台風って言うほどすごく強い台風だって、此処にいる5人が懂れるほどすごい奴なんだぜ。なあ、ダムレイ、フンシェン、アータウ、コンパス、メアリ。」

「そうだよ。室戸台風みたいに強くなれたらな。」

「そうそう、メイミーちゃんって結構強いんだって。」

メイミーは頬を赤くして言った。

「あ、あれは、ちょっと力を出し過ぎたというか、たまたまなのよ。だからいきなり声かけないでよね。」

メイミーの頭から少しだけ湯気が出ていた。

カトリーナは、室戸台風という伝説の台風がどういう人物か気にな

っていた。

「私、室戸台風って強くて紳士ぽくって、優しそうで私の悩みを解決してくれそうな感じする。」

メアリーはカトリーナに言った。

「もしかして、恋に落ちた。」

「でも一度会ってみないと分からないです。」

カトリーナは、なんだか嬉しそうな気分になっていた。

「だったら僕に任せてよ。」

「キロギー、室戸台風とは。」

「知り合いで友達だよ。カトリーナちゃんの言うとおり、とてもいい奴だよ。」

「ホント？」

「一回、誘ってみようか。」

「ありがとうキロギーさん。」

次回に続く

7話 伝説の台風「室戸台風」の巻（後書き）

次回8話室戸台風とカトリナ。お楽しみに！
次回、両想いになるか？これは見逃せない！

8話 室戸台風とカトリーナ

カトリーナはわくわくしていた。

「室戸台風さんってどんな方なのかしら。気になるー!」

カトリーナは、室戸台風が修行している崖の所にやってきた。

室戸台風は、崖っぷちの所で意識を集中し瞑想をしていた。

「よし、これで第三段階を終了だな。そう言えばカトリーナさんがくるって言ってたな。」

室戸台風は、カトリーナと出会った。

「はじめまして、こんにちは。」

「はじめまして、カトリーナさんですか。」

「はいっ♪」

元気そうな声で室戸台風にあいさつしたカトリーナ。

今回は、挨拶だけ交わしに來ただけであったが、両想いになる日が近い。

カトリーナはそのあと、喫茶店でのんびりすることにした。

8話 室戸台風とカトリーナ（後書き）

次回 9話 快適な遊び。お楽しみに！
ピクシブにてOPとEDの主題歌歌詞発表予定。

9 話快適な遊び

ダムレイは、暇な顔をしていた。

フィートウとミリネは、楽しそうにオセロをしていた。

「良いよな、なんかパーマアの家、ゲーム機もあって。」

パーマアとルピートは、ダムレイが、運動したそうな顔に見えていた。

「だったらさ、ミニ体育館があるから遊んできたら。弟と一緒に。」

「僕達って、お金持ちだから。」

パーマアとダムレイは、ナルガエとスーダエとラナニムとイゴールとトーマスといっしょにトリプルスでバトミントンをしていた。

マッチポイントは9点である。

トリプルスは、ダブルスとは違い、奥にいる人が2人。前にいる人が1人というルールになっている。アウトゾーンはダブルスと変わらない。

楽しそうに戦っているダムレイ達。

そして、夕方になった。

「ダムレイ、また遊びに来いよー！」

「ああ、また来るぜ！」

パーマアとルピートは、良い気分であった。

9 話快適な遊び（後書き）

次回10話人間界に来ちゃった3人組前編。お楽しみに！

次回、驚くべきことが明かされます。自然幻想世界と人間界の時間帯の関係が。

著名・隠れ声優予想

ダムレイ、夢夕イタチさん

ハイクイ、台風X号さん

キロギー、保志総一郎さん

カイタク、黒兎さん

テンビン、六角精児さん

ボラヴェン、台風X号さん

サンバ、夢夕イタチさん

ジェラワット、黒兎さん

イーウィニャ、ヨシムーチョさん

以上です。まだ沢山います。夢夕イタチさん、黒兎さんほかの声優陣のみなさんすみません勝手ながら選んでしまつて。自分やヨシムーチョヨもいます。

10話 人間界に来ちゃった3人前編

自然幻想世界を突然、時空の乱れの嵐に巻き込まれていた。

原因は、人間界にある台風が暴れ出したからである。

「風強いねー。」

クローサとロンワンとサオマイが、人間界に気飛ばされそうになっていた。

「そんなことを冷静に言うなよ。」

「何だよ。」

「ロンワンの言うとおりだ。俺達力を少しずつ消費しているせいで限界が来ているんだぞ。」

「そんなこと言われたって・・・」

3人は、何らかの光に巻き込まれて人間界にやってきてしまった。

「此処が、人間界。」

「どうしよう、どうやって元の世界に戻るんだ。」

10話 人間界に來ちやった3人前編（後書き）

次回 11話人間界に來ちやった3人中編。お楽しみに
タジオ・・・ザ・テイマ

11話 人間界に来ちゃった中編

ロンワンとサオマイが非常に悩んでいた。

「僕達、リアルワールドに来てしまったようだ。」

「本当だよ。でも人間界って想像していたより自然があふれる場所かなと思っていたけど・・・」

「建物が立ち並んでいるから、自然とはギャップがあるよ。」

クローサは、帽子をかぶった緑色のウサギに出会った。

「あのー、自然幻想世界からやってきた者なんですけど。」

「君達、その世界に戻りたいのかい？」

「はい、戻りたいです。」

「人間界は確かに殺風景だ。君達の場所に比べるとな。」

サオマイ達は、彼の名前を聞くことにした。

「あのー、名前なんて言うんですか。」

「未来の台風のオーロラという名前だ。関東地方に猛威をふるって2日間首都機能をマヒさせた台風だよ。」

11話 人間界に來ちやった中編（後書き）

次回 12話 人間界に來ちやった後編。お楽しみに！

12話 人間界に來ちやった後編

「未来の台風のオーロラという名前だ。関東地方に猛威をふるって2日間首都機能をマヒさせた台風だよ。」

未来の台風組という存在は、噂の上で存在なのだが・・・

「噂は本当だったんだ。」

クローサとサオマイは、目を輝かしていた。

「君達・・・」

オーロラは少し困り果てていた。

ロンワンは人間界から自然幻想世界に戻りたくてイライラしていた。

「ロンワンも、元の世界に戻るよ。」

「本当か。どうすれば戻る？」

「そう焦るな。東に400メートル進んだ先にビルとビルの間があるそこに謎の扉があり、そこから元の世界に戻る。」

「ありがとう。一緒に行かないの？」

「残念だが、俺は人間界でやり残したことがあるのでね。」

3人は、謎の扉を開け、元の世界に戻れた。

「やったー。美味しい空気が吸えるわ。」

「ふんっ、だが、人間界の状況は少し深刻だったと思う。」

「ロンワンの言うとおりだったよ。なんかさびしかった。」

一方、人間界では・・・

「オーロラの力で貴様等を消し飛ばす！」

「うおおおおお！」

「おりややあああ！」

でかい爆発音とともに、白いウサギの焼死体が現れた。

「侵略をする者、この星に来るべからず！」

12話 人間界に來ちやった後編（後書き）

次回 14話兄弟みたいな喧嘩「ハイクイとロンワン」の意外な関係。お楽しみに

と言ってもボーイズラブ的な感じではないのでご心配なく。そうすると「タイ腐レ」になりますから。次回から新OPテーマと新EDテーマが発表されます。また今回登場した未来の台風組は、今回は登場しませんのでご注意ください。今回のお話実は別の作品につながっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7348t/>

Typhoon Friends

2011年11月10日18時07分発行